

幼児の活動の観察

津守 きょうは、幼稚園における幼児の活動がどのような意味をもつかを考えるために、ここにお集まりの方々に、午前中付属

幼稚園で観察していただきました。ここで観察された具体的な

「活動の例を中心にして、それがどういう意味を持つか」ということを考えたいと思います。大きくわけて二つのことが考えられると思います。

一つは、教育的ということばに問題があると思いますが、子どもの活動にどのような教育的価値があるかというところから、そしてもう一つはそれが子どもにとって、どういう意味をもっているかというところからです。具体的な例をあげていただき、他の方たちにも意見をいただいで進めていきたいと思えます。

○製作活動の中で

津守 私のみていたのは、四歳児のクラスです。部屋の中で七、

八人の子どもが製作をしていました。その中の一人、Kちゃん

が画用紙を丸めてセロテープでつけ、筒っぽを造っています。

先の方にハサミのきざみをつけるのと先生のところへいき、「ここどうやったらいいの」などいろいろ話しかけ、また机のところにもどってきてセロテープではりつけ、先生のところにまた持っていく。一段階すむと先生のところに持っていく、先生も余りたくさんのことをいつているのではないのですが、また一段階できると先生のところに持っていくます。

何か自分で考えて造っているのですが、その途中途中で先生

司 会 津 守 真

出席者

O (大学院学生)
Y 先生 (幼稚園教諭)
M 先生 (幼稚園教諭)
I (研究員)
T 先生 (幼稚園教諭)
A・B・C (実習生)

に確認してもらいたいのですね。先生が何かいうと満足して製作活動を続けるのです。だんだん造っているものがロケットだということがわかってきました。「ほら、本物になるからね」と、自分で考えたものを紙でこしらえようとしています。新しい考えがでて、自分で切ったりはりする必要なのですが、それを実行する途中途中の段階でやはり先生の助けを必要としているのですね。助けといっても、ただ先生に確認してもらえばいいというだけなのですが。

○ 子どもが何か造るといふ時、何か自分でおもしろいことを思いつき、発見し、実行にうつす、そこで先生がちょっと確認してあげる、そういうちょっとしたことでも子どもの創造性が伸びていくのだといえるわけですね。

津守 ええ。そのあと私をつかまえて「おじちゃん、何しているの？ 堀合先生ね、頭は心配しないでね、メガネだけ心配しているんだよ」ということをいうのですね。私は最初のうち何をいっているのかわからなかったのですが、堀合先生のとこに自分の造ったものをもっていくと一緒に考えて、頭を使ってくれらるということが、子どもには、メガネがキラキラ光っているようにみえて、こういうことばがでてきたのではないかと思うたのです。先生に確認されたという感情がこういう形ででてくるのかなと思った例です。

Y そのKちゃんという子はなかなかせん細な神経をもった子ですね。

津守 受け持ちの先生もそのようにいってましたね。

ここで子どもの造るといふことを題材にしているのですが、他に造るといふことの記録がありますか。

A 三歳児ですが、明日かあさって大きい組でお店ごっこをします。その時買物をするためにさいふを造ることになり、関先生が材料など用意し、私も手伝っておりました。ある子どもが「先生、造って、造って」というのですね。「一人で造れるでしょ」といっても「造って、造って」といってきます。最初あまえていふのかなと思ったのですが、よく聞いてみると「僕が造るとへんになっちゃうからいやだ」というのです。「へんになってもいいのよ」といってもどうしても承知しません。お金を描く時でも、他の子は紙にすぐ円を描くのですが、その子はボタンを使って円を描くのです。型のきれいなものしか造れないというか、安心してできないというようすが見られます。

ここの幼稚園では、子どもの自由表現が重んじられていますから、ほとんどの子どもが自由に伸び伸びといますが、その子どもだけ何かちょっと自分の思うようにくふうができません、型にとらわれるようなようすが見えました。

M その子の家庭に何か問題があるのではないのでしょうか。例え

ばその子の母親が「こんな絵はだめ！ちゃんとした絵を描きなさい」とか「兄の方が上手でその子は上手でない」というように。

津守 なるほど、僕はできないかと思ってしまっている場合ですね。

「この幼稚園の製作を見ていると、自分で思ったものを何とか形にするというそのところの努力に重点がおかれていますね。私がみていた組が、あなたがいわれた明日かあさってやってくる組ですね。きつと造っている場面がきつき私のあげたKちゃんの例ですね。

T 五歳の組でも製作をしていました。女の子が一枚の画用紙で立体的なお菓子をを入れる家を造っていました。四角い家の形にし、山形の屋根がふたになるように造っているのです。それを造りおえた時、村井先生がそこをうまくとりあげて、この子はこういういい考えをしている、というそのくふう点を囲りにいた子にみせてあげています。囲りにいた子どもたちも、うなずきながら真剣にみているのです。

津守 こういうことを皆に話すということはその子が考えついたいいことを認めてあげて、引き立ててあげるといことですね。

T ええ、それにでき上がった結果だけではなく、努力して考えている子ども自身のそういう姿勢を伸ばそうとなさっているように思いました。

津守 製作というものの中で、ただ技術というだけでなく、子ども

の新しい考えが伸びていくのですね。そして自分で考えたものを実現したいと努力がはられるわけですね。

Aさんのだされたのは、そこに入って自分のものを実現していくという段階にいかずにそこでチェックされて、さまたげられる状態ですね。Oさんの例の中に子どものお話の中にお母さんの考え方が反映されているのがありましたね。

O はい、男の子が一人庭にベタンと腰をおろし、足をなげだして、小さい石を拾っています。そばでもう一人の男の子が立ってみているので、すわっている子が「○○ちゃんしようよ」というと「僕ママにおこれちゃった」というんです。「何おこられたの」とその子がききかえますと「この前、それをしてマにしかられちゃったんだよ」という会話を聞きました。その子はやりたいのだけど、ママのいったことが気になるのです。

B 四歳児のクラスで、一週間ほど前から動物園造りをしています。来週そうそうお客さまを招いて動物園を開こうという予定なのです。あき箱やストローなどを使って立体的な動物が次々にでき上がっていくのですが、ある女の子が、こんなに日数がかかっても、造っていい時間がこんなにあったのに、まだ一つも動物を造っていないのです。その子はとてもおとなしくて、幼稚園が終わるとあの子は今日何をしていただろうかと考え

せられるような子なのです。

その子がやっと昨日から小鳥を造りはじめました。その小鳥といっても他の子なら立体的な箱など使って、色をつけたり、いろいろくふうするのですが、その子はただ画用紙に絵をかいてそれを切ってはりあわせるだけなのです。昨日は失敗して、今日やっと一羽かいて、一色いろをぬって、しかも一日がかりなんです。先生に「何を造ったの？ 造らなかつたの？」と聞かれ、昨日からとりかかり、二日かかってやっと小鳥一羽を造ったということで、こういう子はここの幼稚園では、珍しいのですね。ということで印象に残りました。

津守 それだけに貴重な小鳥ですね。自分から造りはじめたのですか。

B はっきりわかりませんが、隣りでおしゃべりの女の子が、小鳥を大きわざして造りはじめたので、何らかの影響はうけたでしょうね。

津守 それについてどういうふう考えたらいですか。

O 昨日は失敗しても、今日またはじめたということに意義があると思います。子どもの中では気持ちのつながりがあったと思うのですよ。

津守 やいやいやいわれたのではなく、ながい時間かかって、自分でそういう気持ちが出てきたのでしょうか。

B 先生はあまり強制なさいませんからそうだと思いますが、他の子はもうたくさん造っているのに、そういう気持ちになるまでに非常に時間がかかるということそのことを大事にみてあげなければいけないーと思いました。

○そのものになる経験

津守 紙製作ということからここまでできましたから話題をかえて、ここで他の場面にいってみましょう。部屋の中の活動で何かありますか。

Y 三歳なのですが、部屋でプラスチックの棒で床に大きな輪を造ったり、一か所積木がつんであり、その中が海か池のつもりで積木からとびこんだり、泳いだりして、その中で遊んでいました。前から続いていたのですが、木の棒をおき、さめにし、さめだ、さめだといって輪の中を走りまわります。そうすると輪がこわれ、さめがにげます。また輪にしてそこが海だという遊びをしていました。三歳ですからそれほど長く続かず、それぞれがバラバラにちがう方へ散ってしまうのですが、その場所にもどつてくるとそのさめの話が続いていくのです。

津守 どれくらいの人数ですか。

Y 男の子が三人、女の子が二人でさわぎまわるということを楽しんでいたようです。バラバラになるのですが、もどつてくる

とサメをばらまいて続くのです。

津守 それはよくあるような遊びのはしっこみたいなものですね。それをみていてどういう意味を考えましたか。

Y ふざけて楽しいということが子どもの一番楽しんでいることだろうとみていました。

津守 ふざけて楽しいということですが、それはどういう意味をもつのでしょうかね。

Y 友だち同士の交わりができる、一緒になってキャーといつて手をつないだりする、一つのことで気持ちが一緒になるっていうのですか、そういう楽しさがあると思いますが。

津守 つまり、ふざけて皆でワーツと発散させる、外にエネルギーが向かう、それが友だちを結びあわせる力になったりすると理解していいですか。

Y エエ、そうですね。ですからどれだけあの子たちがサメを理解して、皆がサメにたべられるとかいうのではなく、雰囲気の中でサメを想像しているのです。

津守 そうですね、そういう例というのは、おそらくずい分たくさんあると思いますね。そんなことでもう少しつけ加えてみてくれませんか。

C 三歳児のクラスですが、おひなまつりの時、大きいクラスの劇の中にチョウチョがでてきました。それをおぼえていたらし

く、次の日にチョウチョウを造るといいだし薄い紙にマジックで描いてチョウウを造り、皆でチョウウになって遊んでいました。それをあとで先生がリズムの時に利用したこともあってか、造っていなかった男の子も次の日に自分たちから自由に造りはじめます。次の日も、次の日も、朝くると男の子も女の子も「チョウチョつけて」といって、つけてもらうと遊戯室にいき、走りまわってきたり、お部屋で走りまわっています。それはただ単にチョウウをつけているというだけで、走りまわってよろこんでいるのです。

津守 なるほどね。チョウチョを背中につけるといっただけで、自分がチョウウになってしまうのかしら。

C ええ、先生が「アラ、朝早いチョウチョさんが生まれましたよ」というと「キャー、キャー」といって机のまわりをはしりまわっています。男の子たちも即席で、模様もない、セロテープがべたべたとくっついていっているのもよこんでチョウチョになりきっているのです。

津守 おもしろいですね。チョウウをつけるといっただけで、そういうふうに分がチョウウになってしまうわけですね。

T 五歳の男の子。外のスベリ台のあたりで、坂のトンネルがあるところですよ。七、八人がバドミントンのバットを小わきにかかえてババババンとうちあいをしています。コンクリの坂の

一番上でうたれると、泥まみれになって、下までころがって死んだように動かない。下の方にいる子は上の子を、上にいる子は下の方の子をと、構えてうち、うたれる、うたれるとそれれけがをしたり、死んだりの表現をして、またおきあがりうちあい、たおれるといった活動をしていました。ようすをよくみても敵、味方だとか、悪いやつをやっつけるとかいうのではなく、ただバドミントンのバットを構えてやたらにうっているのです。トンネルの上からとびおり、ころがり、友だちとぶつかり重なつて、泥まみれになって一人一人が全身で楽しんでるのですね。そして五歳の男の子の活動量の大きいのは驚きました。

津守 そのものになりきっているわけですね。

○ そのものになってしまふという例で、三歳の子どもですが、遊戯室の網のところで、何人かの子どもが遊んでいました。一人の男の子がホッピング板を裏がえして、組木のバーベル状のものをもつてきて、それをホッピングの中に入れ、ハンドルがわりにして、自動車みたいに動かしていました。そのうち網のところで大勢の子どもが遊んでいるのをみて、ホッピングをひきずって網のところにもつていき「入れて」といいます。網のところにはいた子どもたちは、特別まとまった遊びをしていたわけではないのですが、その子はそこに入ったつもりになりま

す。そして相変わらず運転をしています。そのうちいつのまにか船長さんになり、「僕、船長さん、船長さん」といいますが、他の子はわりあいキョトンとした顔をしています。本人はハンドルを動かす動作をしながら「沈没しそうだ」とか「船が駅につきます」とかいつています。一向に駅につくようすも、沈没する気配もないのですね。自分でいって、それにひたりきっているのです。一人の子どもが偶然運転している前に立ちふさがったのです。すると「あつ、ウルトラマンだ」といいます。いわれた子は最初そういうつもりはなかったのですが、そこでそうなつてしまふのですね。ウルトラマンのような格好をして向かってくる。船長さんが「こっちじゃなくてあっちだ」と前方の箱つみ木の方を指さすと、ウルトラマンのようすをしなから箱つみ木の方に向かっていって箱つみ木を押ししたりします。子どもの中でどんどんイマー・ジェネーションが展開して、ここに入つてなかつた全然関係のない子どもでもちよつとしたきつかけで何の抵抗もなく入つて進んでいかれるのですね。外からみていると子どもの中の動きというのがどういふふうになつているのかなど興味深く感じたのですよ。

津守 そうですね。そういうことは実に多いですね。そして物になつてしまふというところ、自分にそのものを理解する、外側から理解するのではなくて、そのものの意味というも

の子どもが子ども自身でつかみとるという大変大事なものが
あるように思いますね。

○うまく遊べた経験、うまく遊べなかった経験

津守 それではこの辺で他の例に移りましょうか、Mさん何かありますか。

M 四歳の子でも、砂場で二、三のグループが遊んでいました。一人遊びをしている子がシャモジをいっぱい砂の中にさしていました。別の子がそこにきて、「シャベル下さい」「いっつ」「いっつ」、横にいた女の子がきて、「シャベル下さい」「はい」女の子「いくらですか」「10円です」女の子がお金をわたすまねをしますと、今度はさっきの子にお金をもらわなかったものですから、その子のところにいき「50円下さい。50円下さい」といいにいきます。その遊びはそこでおしまいなのですが、シャモジの男の子は「いくら」といった女の子のグループに入り、一緒に遊ぶ方向へ発展していくのです。

その子も、もし機会があれば、もっと早く一緒に遊びたかったのではないかと思いました。

津守 ほんのちょっとしたチャンスで一緒に遊ぶことができるという例ですね。この場合きっかけというのは偶然にと考えていいのかしら。

M ええそうですね。そのいった方の女の子にしても、別にその子をきそう気があったわけではないのですが、自分がシャベル屋さんとして認めてもらったということから、その中に入っていたのではないかと思います。

津守 なるほど、やはりそこで認められたということですね。

M ええ、自分の存在を認めてくれたということが、その男の子をひき入れたのではないかと思います。

C 私はその逆の例で困ってしまったのですが、女の子が一對六でけんかをはじめ、私が原因を聞きにいったときに、その一人が「ピアノの練習が今日だ」というのに他の六人が「明日だ」ということで一對六になっていました。一人の子もぜったいにいいはるし、六人の方もいいはるので、私はどうしていいかわからなくなってしまったところに村田先生がいらっしゃり、原因を聞いたりしていますと、その一人の子がおもちゃを一人じめにしたということでした。村田先生は「いじわるをしてはいけない、皆はおながすいていじわる虫の子があげられて……」と皆を笑わしておわりにしたのですが、最初はちょっとしたことがどんどん波及して大きくなってしまおうのですね。

津守 最初はものとりあいから、ピアノのレッスンのいいあいになるのですね。そこで、けんかまでに波及し、そういう感情が長びいたということは、子どもとして学ぶところがあつた

と考えていいのかしら。

C その場面では一人の方の子は、すわりこみ、他の六人はチヨウをつけていて、飛んでいって帰ってきて「明日だ」といって飛んでいくというふうには、六人の方は遊びにつながる、何か楽しんでいっているといった感じがしました。

津守 そういうことは幼稚園の中では当然、起こることでしょうね。そうやって社会生活の不安というのも一人の方の子は学んでいくのでしょうか。(笑)

C その子が偶然気の強い子で、あくまでいいはっていたので、余計長びいたと思います。

津守 なるほどね。その子にしてみれば、他の子に同調しないで、自分であくまでも自己を、初心をつらぬいたという経験をしたわけですね。他の六人も皆が皆同じ気持ちだったということは、あやしいものです。

C 一人の子に他の子によってするということがらしいですよ。

津守 一人の子にしてみれば、大変よい経験だったということがいえるかもしれませんね。

これも生活の中の一コマであり、そういう中に案外非常に大きな教育の場というものが、教育されている場というふうなものがあるように思うのですが、どうなのでしょうね。

I 私の例もそのたぐいかと思いますが、大きい組の女の子がブ

ランコで三人、鉄棒で二人、お互いに声をかけあいながら、遊んでいました。そのうちブランコをしていた女の子が「皆でブランコを横に次々に移っていきこう」と提案したのです。すると五人がバツと一緒に、あらそってジャンケンまでして順番をきめ、並びました。提案した人が一番先に動きはじめ、皆それをみていたのですがあまり興味がのらないらしく、隣の方をみたりしています。やはりはじめた子も段々動作がゆっくりになり、ほとんどその遊びが中止された形になり、他の子はなにもやらずに終わってしまうのです。提案したときには、皆がとびついてきた、その喜びに比べると全然遊ばなかったというのが印象に残りました。

津守 いきおいよくはじめるのだけれども、うまくいかなかった例ですね。みていてどうしてだと思いましたが。

I わからなかったのですが、となりで男の子たちがブランコをしていたので、そっちの方がおもしろそうにみえたのかと思います。

津守 いきおいよくはじめたのだけど、うまくつづかなかったという経験をしたわけですね。あえていうならば、子どもにしてみると何かそこで気づくことがあるのではないですか。わっとはじめても、こういう時はうまくいかないのだという経験を通して、どういう提案をすればうまくいくかということを考える

ために一つの段階を通ったことで、いくつもうまくいかないことを経験して、その中にうまくいくことも経験していくのではないですか。うまくいく経験だけでは本当にわからないものが、うまくいかなかったときにわかるというそういう経験も必要なのだと考えるのは考えすぎでしょうか。

○ うまくいかない例で、五歳の男の子が四人で野球をしています。子どもたちはテレビなどでみているので、イメージとしてはすごいがあるのだけど、なかなか技術がそこまでいかなかった。ボールを投げてもうつ人のところまでうまくとどかないし、うとうとしてもボールがバットにあたることはほとんどありません。だけどとにかく、少しづつづつづつづつづつ。ちょうどその時、別の遊びをしていた子がころがってきたボールを急にワッと投げとばしました。野球をしていた子は不満そうに、妨害されたような顔をしてワッと叫びましたがとたんに「いちやめた」とサッと野球が解体してしまいました。子ども自身も何となくうまくいかずに、でもやめるところまでふみきることができなかったのが、ちょっとした契機でくずれてしまうわけです。イメージだけあっても技術がともなわないと、その遊びが発展しないという感じました。

津守 さっきの例の中にも、先生のところにもって行って確認してもらおうというのがありました。もしそこに先生がいれば、

向く方向がみつかると思いますね。

○ ええ

津守 だけど、そうやって先生がいて伸びる経験も必要だし、うまくいかない経験も必要なのでしょうね。

○子どもの活動を尊重して

T 四歳の女児A子が、砂場で、池をつくっている同クラスの男の子二人、女の子二人のグループのところいき、何の抵抗もなく一緒に泥水の中から泥をすくいあげはじめます。

B子はジョーロ二つで水をくんで池に「雨、雨、雨の音よ、こわいわねー。もつと雨ふらせるわよ」といいながら入っています。泥をすくっている男の子が、「A子ちゃん、ここに入ってごらんよ」というと、A子は泥水の中にくつごと片足を入れます。両手を深く入れ、男の子二人に「手入れてごらんなさい。すごく深いわよ」というと男の子は二人とも、中に入れ、顔を見あわせてニコッとします。A子はまたくつを泥水の中に入れるのです。今度は前よりも深く入れ、満足そうな顔をして、男の子の方をみて何かいいます。B子はこの池遊びを最初からしているようで、エブロンは水と泥でベチャベチャ、時々エブロンをつまんでみてはまた、活動をつづけています。

A子もB子もよごれなど全然気にしないで、自分の気持ちと

活動とが一緒なのです。A子は「私の足みてよ、どろどろよ」と皆にみせていますし、B子はよごれたエプロンをつまみながら、「エプロンぬいでこよー、これどうしてくれる。このエプロンまっくろけー」といいますが、何か充分に活動したあとの満足感というのでしょうか、実に楽しそうなのです。

B子が堀合先生のところにいきましたので、先生はどうなさるかとお興味深く思い、私はB子を追ったのです。先生は「お手手洗ってらっしゃい。それから取ってあげましょうね」B子は手を洗いにいき、手先きだけ洗ってすぐもどってきます。先生はエプロンをとってあげながら「あそこでかわかしておきましょう。お帰りまでにはきつとかわくでしょう。もう一度洗いねいに洗ってらっしゃい」といいます。

津守 子どもの活動が中心になって、それを伸ばそうという指導法ですね。

T ええ、先ほどOさんの例の中の「お母さんにしかられるから」と自分のしたいこともしなかった子に比べますと、いきいきと活動していると思いましたが、子どもの活動を大切にして

津守 今日、いろいろの活動の例をお話いただきましたが、皆さんの見られた例を全部つくさないうちに、時間がなくなってしまう。わずか一、二時間見ただけで、幼児の活動の

中にはほんとうに数多くの貴重な経験があり、その中で幼児が成長している姿をみる事ができたように思います。きょうお話に出たのは、私どもの目にふれたごくわずかの部分にすぎないのでありまして、そう思うと、幼稚園の生活の豊かさに驚かされます。ちよつとみると、遊んでいるだけのよう

にみえるところに教育的な経験があるのです。

きょうは皆さんごくろうさまでした。

幼児の教育 第六十六巻 第六号

六月号 © 定価八〇円

昭和四十二年五月二十五日印刷
昭和四十二年六月 一日発行

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番
◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします